



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

気づけば庭先にはこでまり、芍薬の花が咲き始め、れんげ畑を耕す音が朝からにぎやかな季節を迎えた。うど、たけのこ、ふき、ホタルイカ。ほんの一時出回る季節の味が、年々楽しみになってきた。新生活をスタートした人にとっては、ほっとできるゴールデンウィーク。小田原は今年も北条祭りで熱くなる。丹沢、大磯、伊豆高原・・・恒例となってきた近隣のアートフェスティバル。新緑を楽しみながら、ゆっくりアートめぐりをするのにも良い季節がやってきた。新九郎の5月も、楽しみな企画が目白押しです。皆様のお越しをお待ちしています。

新九郎 5月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会期 展覧会名	見どころ
	5/1(水)~6(月) 新九郎デッサン会 展	毎月1回新九郎で開催しているデッサン会のメンバーによる展覧会
	5/8(水)~13(月) 第30回 光友会写真展	風景、花等様々なモチーフの写真展、メンバー8名
	5/15(水)~19(日) 上村敬子作品展	マーレングラスリッツェン 手作り小物チャリティバザー 同時開催
	5/20(月) 新九郎デッサン会	どなたでもお気軽にどうぞ! 18:15-20:45 会費 1500円 コスチューム、固定ポーズ
	5/22(水)~27(月) 第5回 フレンズ絵画展	油彩画、水彩画によるグループ 展。会員20名

会期・展覧会名	会場
5/15(水)~5/20(月) 第10回水彩画愛好会作品展	アオキ画廊 1F 0465-22-0825
5/22(水)~5/27(月) 第36回あらたま展	飛鳥画廊 0465-24-2411
5/1(水)~5/6(月) 大門雅絵展	お堀端画廊 0465-23-7819
5/8(水)~5/13(月) 第23回 小田楳水彩画展	お堀端画廊 0465-23-7819
5/22(水)~5/27(月) 高橋恵美子展	お堀端画廊 0465-23-7819
4/30(火)~5/12(日) 船坂芳助展	すどう美術館 0465-36-0740
5/14(火)~5/26(日)東日本げん きアートプロジェクトチャリティ展	すどう美術館 0465-36-0740
5/1(水)~5/10(金) 命・輝き 生きものがたり	ギャラリーぜん 0463-83-4031
5/13(月)~5/19(日) 竹のある生活	ギャラリーぜん 0463-83-4031
4/30(火)~5/5(日) 小泉正彦油絵展	丹沢美術館 0463-83-9550
5/22(水)~5/26(日) 第66回 小田原市市展 2013	小田原市生涯学習センター 一ヶやき 0465-33-1706

小田原街なみスケッチ

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 岡田昌康
 第4回「国府津海岸からの路地」



開成町の生涯学習「国府津スケッチ会」を計画し、下見に出掛けた。「模模国府の近くの港」の意味で「国府津」と名が付いたと言う。

駅前1号国道と平行に、国府津海岸沿いにもう1本の道が、直ぐ近くを走る。2本の道の間には、互いを結ぶ沢山の細かな路地が櫛の歯の様に並ぶ。

国道から海岸道へ、海岸道から国道へとその路地を探検しながら、1本の細い路地をスケッチした。人

1人が通れる幅しかない。その割には、緑の樹が豊富に繁り、表札の有る門と重厚な煉瓦塀が腰を据える。心にゆとりのある路地である。人は通らない。後ろからは波の崩れる音、前方奥の国道からは微かな車の音。国道沿いの古い家並みが狭い隙間から覗き見える。猫が1匹近付いて来、思わず脇に寄って路を空けてやった。

思うことなど 横井山 泰



そろそろ風の気持ちいい季節である。新緑とカラッと晴れた空気はまさに「春すぎて夏来にけらし 白妙の衣ほすてふ 天の香具山」である。

近頃は6月の新九郎での個展に向けて描いている。昨年 ASHIGARA アートフェスで滞り制作した大作を含めて大きな新作が並ぶ展示を考えている。また小品(肖像)100点で構成する壁面も作るのだが、こちらはなかなか苦労する、2008年に岡本太郎美術館で発表した百人一首シリーズ(小倉百人一首の歌人全員のポートレート)から発展した作品である。百人一首を描いたのは友人の詩人ピーター・マックミラン氏が出版した英訳百人一首の表紙に作品を提供したのが切掛けだった。制作にあたり歌の意味や時代背景、歌人の人生などを調べていった。すると、異次元に存在しているように遠く感じていた歌人たちが身近に感じられた。恋愛に一喜一憂したり、完全に凹んでいたたり、仕事や人間関係で苦しんでいたり。彼らの境涯が自分となんら変わらないことに気付いた。他人とは思えなくなったのである。今回の100点は人間の顔である、喜怒哀楽の顔に交じって動物も登場する。それは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚とコロコロと輪廻する日常の様子である。ぜひ観に来てください。ギャラリー新九郎の個展は6月12日から24日まで、15日のレセプションの前には落語会もありますよ。

アトリエ訪問 ひよこアートプロジェクト 中津川浩章 小田原市



クレヨンで書き始めたシンデレラは、どんどん巨大化していき、4つ切画用紙8枚の作品になった。緑の絵の具をスプーンとたてに筆を動かす。隣の色と混ざらないようにまたスプーンと繰り返す。緑は黄色に変わり美しいグラデーションが出来上がっていた。椅子に座ってマーカーで色とりどりの文字を丁寧に描いている。模様のような色文字がリズムよく画面を埋めていく。文字だけが絵画だ。絵具を筆先に付け、点描を画用紙におく。赤、黄、青、緑、集中する筆先から自由に描かれた点が美しい。真剣に画用紙に向かう子供たち。子供たちの様子をゆったり見守るお母様方。ひよこアートプロジェクトの月1回のワークショップの様子だ。

富水駅前のビルでこの絵画教室が始まったのは約1年前だ。「障害を持つ子供たちがのびのびと表現する場を作りたい。」ひよこアートプロジェクトを主宰する萩原美由紀さんが始めた動機だ。障害を持つお子さんから表現の力が湧きあがっている様子を近くで見ているのだという。何とか子どもたちの表現力を形にできないか。そんな時、作家でもあり、長年障害を持つ子供たちの指導をしている美術家中津川浩章さんと出会い、会場の提供者の協力を得て、この会が始まった。生徒は約20名。月1回の教室を楽しみに西湘地区から集まった仲間たちだ。

「アール・ブリュット」(美術の専門的な教育を受けず既存の芸術や流行にとられない作家たちの自由でのびやかさ表現をさす)の作品展は、日本ではま

だまだあまり馴染みがない。ここ数年、「アール・ブリュットの作品展」を何回か見る機会があったが、際立つ個性、強烈な色彩、自由な発想と作る喜びに満ちた作品にくぎ付けになった。岩手県立美術館「アート・ブリュットの世界」展では、パリの市立美術館で12万人の観客動員をし大反響のあった『アール・ブリュット・ジャポネ展』の様子が映像で紹介されていた。日本ではこういった作品を多くの美術館で展示・所蔵するまでには至っていないが、美術作品としてふさわしい展示の機会を広げ、より多くの人にその作品の魅力に触れてほしいという新九郎の企画がこの度実現する。

この教室の指導に当たるのは、小田原在住の中津川浩章さんだ。子どもたちの作品から「芸術の原点」を見るという。自分を開き、人間の奥底にあるものを開いていくことの素晴らしさ、表現することで解放されていく部分は、作家である自分と同じだと感じているという。



ここには、指導はない。クレヨン、マーカー、絵具、鉛筆。部屋の中央に置かれた画材の中から好きな画材をそれぞれが選び、好きな場所で描き始める。ぐいぐいと描き進める人、じっと画面に向かって紙とにらめっこしながら考えている人、中津川さんは、子供たちの間をゆっくりと見て回りながら、「きれいだね。」「できたの」「四つ葉のクローバーだね。」「午前中の色はきれいだね。」と声をかけながら、子供たちとコミュニケーションしていく。教育現場とは異なった制約のない場で、どの子どももただ自由に、使いたい画材を選び、描きたいことを何の制約もなく描く。制作に没頭できる場、自分を表現する場がここにある。「でき

た」今までずっと集中していた女の子の顔が笑顔に変わった。かわいいピンクが画面にあふれる春らしい感じの作品だ。休む間もなくまた新しい紙をもらい、次の1枚を描き始めた。皆どの子どもも集中して楽しんでいる。

今までの作品をみせてもらった。白と黒だけを使って描いた作品。長い髪に鉛筆でぐいぐい書いた線の跡が力強い作品。一人で、二人で、順番に描いた大作だ。寝転がって体でこすったようなぼかしも味がある。ペットボトルに色とりどりの毛糸を巻いた作品。紙粘土を小さく丸めただけの作品…子供たちの楽しく創作する様子が伝わってくるものばかりだ。カラフルで力強く楽しさにあふれている。「表現することは生きること」子供たちの作品は「本能の絵」なのだと言っている。そして、「障害者の作品」というカテゴリーを脱し、「作家」として、「作品」として子供たちの作品を楽しんでほしいと。

5月29日から新九郎にて初の展覧会が行われる。自由な発想と作る喜びに満ちた作品を、一人でも多くの方に見ていただきたい。子供たちの作品の先には、ココロにある偏見や固定観念を拭き去り、互いの個性と人格を認め、支え合う社会に繋がっているのかもしれない。新九郎の空間にどんな世界が現れるのか、今から展示が待ち遠しい。(新九郎友の会 木下和子)



四月のふたつ
坂田計雄油絵展がアオキ画廊で開催された。西相美術協会最年長の会員である。坂田先生とは三十数年前のデッサン会で知り合い、絵はそれからずっと拝見している。学校の先生をされているというところだが、お会いした頃はもう定年に近かったと思う。その頃すでに白髪でその容貌、細身の身体は若い私から見ると初老と見えた。九十五歳になる今は背筋もすつとし、逆にとってもそんな年齢とは思えないほど若く、三十数年前の印象そのままである。

絵はオーソドックスな写実絵画で、茶を基調にしてデッサンをし、光の具合、ボリュームをみながら着色していく。人物・静物・風景を描く。失礼ながら正直平凡な絵のように感じていたが、昔見た湯河原中?に掛かっていた人物画は記憶に残っている。何か惹かれるものがあったのだろうか。

前回二年前の個展では、はじめて静物画を拝見しその出来映えに驚いた。デッサン会や西相展では人物画しか見ていなかったのが新鮮であった。

昭和二十五年創立の湯河原美術協会、真鶴美術協会の創立会員というから、六十年以上描き続けていることになる。絵を長く描いている方は私のまわりにも多勢いる。しかし坂田先生のようにその容貌も、絵のスタイルも一貫して全く変わらないという方は他にいない。すごいことだと思ふ。

今でも毎日午前中は筆を取るそうである。大作の場合は構図に腐心しかなりの時間をとるが、構図が決まってしまうとあとは仕事が速い。五十号の横臥裸婦はがっしりとして、彫刻的なボリュームを持ち素晴らしい。一つの絵にあまり時間をかけることはせず、自分の描き表したいものがあればそこで筆を置く。執拗に追及する描き方はしない。そうだ。課題があればそれは次の絵でチャレンジということなのか。そういう制作方法を何十年も続け進歩を重ねている。その粘り強さに感心する。午後は散歩と昼寝、そしてピアノでモーツァルトを弾くことが楽しみという。それにしても二年おきの個展はかなりの制作量といえる。これからお元気で描き続けられることだろう。